

ブッシュマンにおける平等主義原則の再考

—ボツワナ，ハンシィ地区（カデ，ニューカデ，カガエ）における
遠隔地居住者の社会変容の比較分析—

関 口 慶太郎,* 高 田 明 **

Reconsidering the Egalitarian Principle among the San: Comparison of Social Changes among the Remote Area Dwellers at Xade, New Xade, and Kaglae in Ghanzi District, Botswana

SEKIGUCHI Keitaro* and TAKADA Akira**

The nomadic lifestyle of the San has been characterized as one of egalitarian societies, and recent studies have depicted their social change as a process of continuous reorganization in which the egalitarian principle is attenuated by external factors but then restored by the San themselves. However, it is less well known that these arguments were based on field research only in Xade and New Xade, where the San's nomadic lifestyle has been best preserved. On the other hand, the authors' fieldwork in Kaglae, which has been a contact zone among various ethnic groups and organizations, identified the following features of social change in this community: (1) most economically affluent people resided far from their relatives to reduce the opportunities of distribution based on traditional kin relational norms; (2) this San society was characterized by multi-layered, complex social relationships with neighboring ethnic groups and organizations; and (3) although hunting and gathering activities around Kaglae declined much earlier than did those around Xade and New Xade, new subsistence activities reflect well the livelihood strategies to which San are accustomed in terms of flexibility in choosing their means of livelihood. These findings suggest an alternative perspective on San society as a dynamic and open system through which people continuously and actively interact with their natural and social environments.

* 独立研究者, Independent Researcher

** 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2018年10月31日受付, 2024年4月9日受理

1. は じ め に

「ブッシュマン¹⁾」は、南部アフリカの先住民・(ポスト)狩猟採集民として世界的に有名である。しかし、膨大な数にのぼるブッシュマン研究の大部分が、実際にはごく限られた地域集団を対象としてきたことは意外に知られていない。そうした地域集団のひとつ、カラハリ砂漠の中央部に住むブッシュマンについては、幅広い専門分野の日本人研究者が、世界的にも類をみないほど継続的に研究をおこなってきた。こうした研究は、1960年代にはカラハリ砂漠の中央部で自律的な遊動生活を営むブッシュマンたちの姿を、そして1970年代以降は遠隔地開発計画 (Remote Area Development Programme, 以下 RADP) の影響を受けて定住的なものへと変容していったブッシュマンの生活様式を描き出してきた。さらに1990年代からは、南部アフリカの諸国家や国家の枠組みを超えたグローバルな社会に訪れた激変の時代を生きるブッシュマンたちの姿に注目が集まっている。

これまでのブッシュマンの社会変容に関する研究では、平等主義の原則が、外部からの影響を受けて変質しつつあるかどうか議論の中心となってきた。平等主義の原則は、ブッシュマンの社会、さらには狩猟採集社会一般の根幹をなすとされ、狩猟採集社会研究、さらには生業様式と文化的体系との相互作用を論じる生態人類学的研究の理論的な考察の中できわめて重要な位置づけにある [Lee and DeVore 1968, 1976; 田中 1990; 寺嶋 2011; Takada 2016, 2022]。本論文の目的は、平等主義の原則と関連づけて理解されてきたブッシュマン社会の特徴、とくに居住パターン、人間関係、生計戦略に焦点をあてつつ、ブッシュマンと近隣の諸民族や諸国家の交流の要所となってきた定住地カガエ (Kaglae) (図1)でのフィールド調査と従来の研究の再解釈に基づいて、ブッシュマンの社会変容について再考することである。

カガエは、ボツワナのハンシィ地区にある定住地である。その住民はブッシュマンやカラハ

1) ブッシュマンという語は、狩猟採集を生業として暮らしていた歴史をもつさまざまなグループを総じて指し示す際の総称で、実際にはさまざまな地域・言語集団からなる。本論文の主要な調査地であるカガエでも、ゲイ、コーン、ナロという3つの異なる言語集団が共存している。同様の総称としては、他にもサン、バサルワといった名称が用いられることがある。しかし、これらの名称にはいずれも以下のような歴史的な文脈を反映した問題点があることが知られている [e.g. 田中 1994: 11-13]。まずブッシュマンという名称は、早くにアフリカを訪れた西欧人(探検家、宣教師、植民者など)がつけた他称に由来する。文字どおりには藪の中に住む人を意味しており、侮蔑的な含意があるとされる。サンという名称は現在では国際的な舞台でもっともよく用いられているが、もともとはサンの近隣に住み、おもに牧畜を営むコイが用いていた他称で、家畜をもたない人々というやはり侮蔑的な含意がある。バサルワという名称はボツワナの主流派であるツワナによるサンの他称で、語源は「南の人」を意味するツワナ語に由来する [Brown 1979]。やはり文明化されていない人々という含意があるとともに、ボツワナ以外ではほとんど用いられていない。ここではこうした問題点を認識したうえで、田中 [1994] などにならない、砂漠に生きる自由人としての意味合いをこめて、日本人にはもっともなじみ深いと思われるブッシュマンという名称を採用する。欧米では、上記の差別の歴史を思い起こさせるために、あえてブッシュマンという名称を用いることもある [e.g. Gordon and Douglas 2000]。

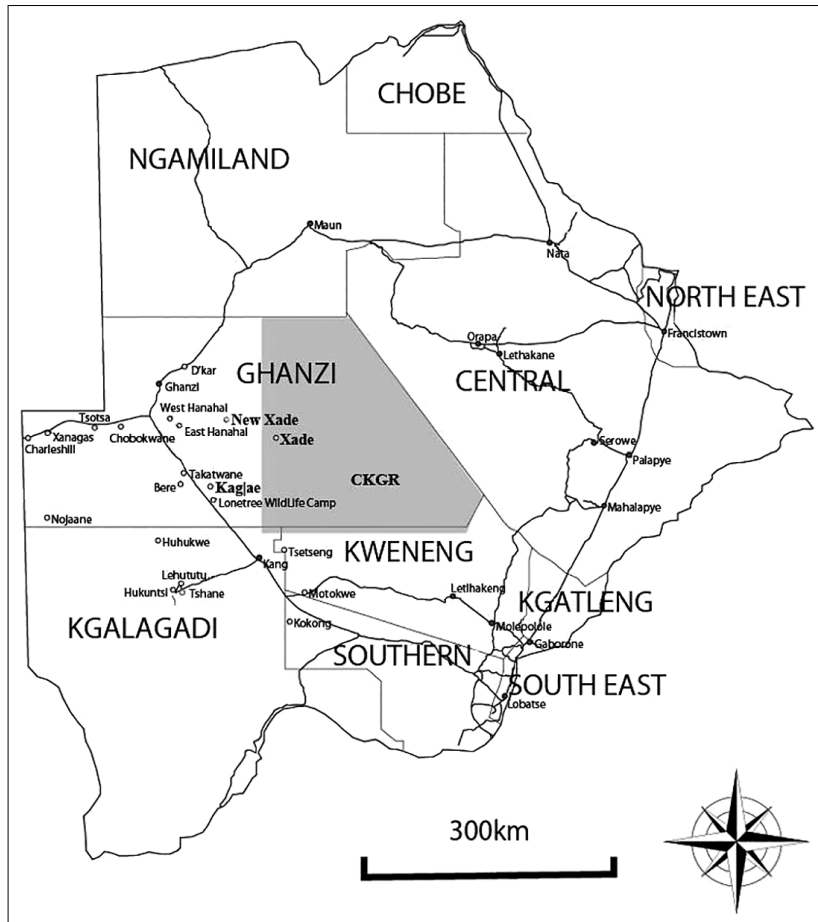


図 1 ボツワナの地図

出所：著者作成。

リ²⁾ などから構成され、RADP の対象となる遠隔地居住者 (Remote Area Dwellers) とみなさ

2) カラハリという語は、ボツワナ中部に広がる乾燥した地域を指し示す場合と、この地域に暮らすバンツ系農牧民の集団を指し示す場合がある。混乱を避けるため、本論文では前者をカラハリ砂漠、後者を単にカラハリと表記する。これらの語源となったツワナ語のカラハリ (Bakgalagadi) という語は、ツワナの一氏族であるバクウェナがブッシュマン以外の砂漠に暮らす人々を呼ぶために用いた語だが、その語の指す範囲はいまいで、対象となる者の立ち位置によって多様な意味合いを含みうる。いいかえれば、もともとは具体的な民族集団を指し示すわけではなく、ある集団の者が他の集団を指して、より未開で従属的な人々という意味合いをこめて呼ぶ際にしばしば用いられてきた [Okihiro 2000: 113]。また、カラハリという民族分類の範囲にはゆらぎがみられ、干ばつの年にはカラハリの人々がブッシュマンに混じって狩猟採集で食いつないでいたという事例 [大崎 2001] や、日本人調査者がカラハリとみなしてきた人々が文脈によってはガナやグイを名のる事例 [高田 2002] も報告されている。こうした問題を意識しながらも、本論文では、古くからブッシュマンの隣人として関係をもってきたバンツ系の農牧民を指すためにのみカラハリという語を使う。

れている。カガエはボツワナ西部を南北に貫く幹線道路の近くに位置し、歴史的にブッシュマンと近隣に住む諸民族、さらにはボツワナと近隣の諸国家の間の交流の要所となってきた。ブッシュマンの伝統的な生活様式に主たる関心があった従来の日本人研究者は、カガエでのインテンシヴなフィールド調査をおこなってこなかったが、上記の問題意識から、第二著者（高田）は1999年9月に2週間、第一著者（関口）は、2013年10月に2週間と2014年10月から2015年1月までの計およそ3ヵ月間半、カガエにおいてフィールド調査を実施した。本論文はこのうちおもに、第一著者がおこなった3.5ヵ月間の調査の間に得られたデータに基づくものである。はじめの2週間は予備調査として、カガエの定住地（インフラを整備したエリア）に滞在した。2回目の調査では全戸を回り、15歳以上の男女を対象とした聞き取り調査をおこない、家族構成や移住歴、就業歴などの情報を収集した。本論文ではこの調査期間中に収集することのできた123世帯、225名の情報を基礎データとする。³⁾ さらに、この全戸調査の合間にも住民がおこなう活動の観察をおこない、個別に興味深い語りが始まったときには、質問を交えながら聞き取りをおこなった。本論文では上記の調査により得られた情報とともに、これまで発表されてきた文献資料を用いて議論を展開していく。もっとも、ブッシュマン社会にまつわる研究の蓄積は膨大で、すでに多くの論文や書籍において何度もレビューがおこなわれてきている [e.g. Tanaka and Sugawara 1996, 2010; Takada 2016; 田中 2017]。そこで以下では、本研究の目的との関連で重要だと思われるブッシュマンの平等主義の原則と社会変容の関係にしばって、先行研究を整理する。

2. ブッシュマン社会の特徴とその変容

2.1 遊動生活と平等主義の原則

日本におけるブッシュマン研究は、ボツワナ独立直後の1966年、当時東京大学の大学院生だった田中二郎がカラハリ砂漠の中央部に住むグイおよびガナ（いずれもブッシュマンの下位集団とされる）のもとで開始した生態人類学的研究に端を発する [田中 1978, 1990]。これに少し先んじて、1963年にはアーベン・デヴォア (Irven DeVore) とリチャード・リー (Richard Lee) を中心とする米国の調査隊が、やはりブッシュマンの一集団であるジュホアンの生態人類学的研究を開始していた。当時の生態人類学的研究の主要な関心は、狩猟採集社会の人々が生きる姿を鍵として、人類社会の始原的な姿の再構成を試みることにあった [Lee and DeVore 1968, 1976]。ブッシュマンを「最後の狩猟採集民」と位置づけたこの試みは大きな成功をも

3) 全戸調査の際には、事前に簡単な質問のリストをグイ語、ツワナ語で作成し、グイにはグイ語、カラハリにはツワナ語で質問した。必要に応じてグイ語、ツワナ語、英語を話せるグイの男性に通訳してもらった。コーンの中にはグイ語、ツワナ語、英語のいずれも理解しない者がいたため、コーンの調査は、コーン語を話せるグイの男性の力も借りながらおこなった。

たらし、リーや田中らのブッシュマン研究は世界的に、また学界のみならずより幅広い社会に知られることとなった。

田中は、遊動生活時から定住化初期にかけてのブッシュマン社会は、以下のような「平等主義の原則」によって貫かれていたと論じている。

ブッシュマンの社会は、身分や階級、職業などといった社会的分化はなく、平等主義の原則によって成り立っている。分配や共同が徹底して実行され、その日暮らしを支える狩猟採集経済の基盤となっているのである。

権力による支配や命令もなく、リーダーも存在しないが、社会生活は親族の絆と、個人人の良識に基づく行動によって維持される。さらに、ひんばんな移動にともなう開放的、かつ流動的な集団構造が、全体としての社会を永続させるための大きな役割を果たしているのである [田中 2004: 42]。

田中 [2001: 47-51] によれば、平等主義的な社会の特徴は以下のようにまとめられる。まず、人々は必要最小限度のもの以外は所有しないし、排他的な所有は認められなかった。調理具や狩猟採集具はみながもっているわけではなく、仲間うちでの日常的な貸し借りで調達されていた。その結果、もつ者ともたざる者の差は最小限に抑制されていた。こうした人間関係は、狩猟・採集活動に基礎を置く生計戦略と深く結びついていた。狩猟や採集にはキャンプ内の老若男女が参画し、共同でおこなわれていた。狩りに成功した人は、けっしてそれを誇示したりすることはなかった。大量の肉などの御馳走が得られると、徹底して平等分配がおこなわれていた。人々はみな、顔見知りの人たちだけで構成されるキャンプのメンバーからの妬みを買ひ、仲間はずれにされることをとりわけ恐れていた。こうした共同、分配、貸し借りは、結果的に一種の社会保障となっており、人々の生存率を高めていた。こうした生計戦略を支えていたのが、彼らの特徴的な居住パターンである。キャンプの規模やメンバーの顔ぶれは、利用できる自然資源などの諸条件によってきわめて流動的であった。この流動的な集団構造は、人間関係から生じる緊張を回避したり、キャンプ間で情報や物資を交換したり、メンバーの交流を促したりするために大きな役割を果たしていた。

2.2 平等主義社会の変容と再編

1970 年代からボツワナでは RADP が適用され、ブッシュマンの社会には次々と変革の波が訪れるようになった。中でもハンシィ地区のカデにはさまざまなインフラが整えられ、ガイやガナの最大の定住地が誕生した。田中やそれに続く日本人研究者は、カデをおもな拠点とし、それぞれの専門分野に基づいて、ブッシュマン社会の諸側面をさらに詳細に描写してきた。カ

デは中央カラハリ動物保護区（Central Kalahari Game Reserve, 以下 CKGR）⁴⁾内に位置しながら、ボツワナ政府による RADP の拠点のひとつでもあったので、ブッシュマンの社会変容は重要なテーマのひとつとなった。とくに、ボツワナにおける現金経済の浸透やインフラの整備を受けて、ブッシュマンの平等主義の原則に基づく生活様式がどのように変化しているのかに焦点をあてた研究が多くおこなわれてきた。

まず注目されたのが、生計戦略の変化や多様化である。グイやガナが遊動や半定住生活を営んでいた 1960 年代の狩猟方法は、ほとんどが弓矢を用いた猟と、小動物を狙った罠猟であったが、カデでの定住化が進んだ 1980 年代頃からは騎馬猟が盛んにおこなわれるようになった。1982 年頃におこなわれていた騎馬猟では、馬の所有者がもっとも多くの肉を取り、それ以外の参加者は猟への貢献度に応じて分配を受けていた。これによって得られた肉の一部は、現金で売買されるようになった。高価な馬をもつものがより多くの肉を手にする機会を得られるため、馬をもたない者との格差が広がるようになった。これを田中は、現金で購入したウマを用いておこなう騎馬猟は外の世界から導入されたものであり、それによって手に入れた肉は、彼らの所有や分配に関わるルールに乗せる必要はないという考えがでてきたと論じた [田中 2001: 58]。

その一方で、1987 年頃におこなわれていた多数の猟犬を使った槍猟では、肉は猟の参加者の間で平等に分配され、騎馬猟のような特定の人間への肉の集中は起こっていなかった。1993 年頃の犬猟や罠猟では、商品としての価値が高まった毛皮の商業利用が進んでいたが、肉の平等な分配も維持されていた。すなわち、狩猟による獲得物の分配方法は狩猟方法によって異なっていた。これらから池谷は、肉の分配などにみられる関係は、総合的にみれば経済的な意義よりはむしろ社会的ネットワークを形成するうえで重要な働きがあったと指摘している [池谷 1994, 2007]。

1990 年代後半、ボツワナの定住化政策は新たな局面を迎え、居住パターンや人間関係に大きな変化がもたらされた。1997 年、CKGR 内の定住地に暮らしていた住民を CKGR 外に再定住させる政策が実施された。この移住に対しては諸処から反対の声が上がっていたが、結果的には多くの住民が政府から多額の保証金を受け取り、移住をおこなった。その過程については、キエマ [Kiema 2010] が詳しく紹介している。CKGR に暮らしていた住民の移住先として定住地が整備された。中でも、やはりハンシィ地区に位置するニューカデは最大規模の定住地である。2002 年には、それまで CKGR 内でおこなわれていた水や食料の配給などの生活に

4) 1961 年に当時の英国植民地行政官であったジョージ・シルバーバウアーが域内の野生動物およびブッシュマンの「伝統的生活」を保護する目的で設置した。しかし、独立後のボツワナ政府は方針を転換して RADP を推進するようになった。後述するように、1997 年からは政府主導で CKGR 内の住人の再定住計画が実施された。

不可欠な行政サービスが停止された。

高田 [2002] はこの再定住の直後にニューカデでフィールド調査をおこない、再定住がグイやガナの社会に及ぼしたインパクトに関する詳細なデータを提示している。これによれば1997年のニューカデへの移住は、再定住地における人口密度の急激な上昇やその付近の自然環境の荒廃をもたらした。また再定住地における居住プロットの選定に際しては、人々の価値観や規範が十分に考慮されたとはいい難かった。これらを反映して、住民の多くはさまざまな場面で再定住への不満について語っていた。とくに狩猟採集から供給される食料の質や量が低下したことへの不満は大きかった。その一方で、周辺民族であるカラハリと密接な関係をもつガナでは、再定住化政策に沿った対応が多くなされ、家畜飼養、農耕、賃金労働が盛んになっていた。その結果、財産を蓄積しつつある者が増えていた。

高田 [2002] は、こうした経済格差の拡大は、ニューカデへの移住に伴って、親族関係に基づく居住集団によるすみ分け傾向の維持、および自然環境に関する深い知識と単純な技術があれば誰もが食料を得ることを可能にする伝統的な生活域へのアクセスが困難になったことに由来すると分析している。さらに、再定住化政策は事実上、国民の圧倒的多数を占めるツワナの生活様式を大半が非ツワナである遠隔地域居住者（ニューカデではおもにグイやガナ）にも導入することであったこと、それゆえ、ニューカデの居住者がツワナとの生活様式の違いについて意識せざるを得ない状況をもたらしていること、またニューカデで進行した経済格差の拡大は、それと関連した居住者間（たとえば、グイとガナの間）の差異を際立たせることにより民族アイデンティティを顕著に意識させる方向に機能してきていることを指摘した。そして、これらはいずれもボツワナ政府の基本方針、すなわち国民意識を育成し、自国の近代化や国際化を進めることをねらって自国内の特定の「民族」や「先住民」を取りあげて公の場で論じることの一貫して否定的な態度を表明してきたことと相反する、パラドキシカルな結果を生んでいると論じた。さらに、グイやガナの研究においても国家や他民族との関係を理論的な射程に含めることの必要性を示唆した。つまりブッシュマンたちの間でも、差異のポリティクス [Young 1990] が重要になってきていると考えたのである。

また田中 [2004] は、ボツワナ政府が実施した定住化政策はブッシュマンが長年親しんできた社会的不和を回避する仕組みを根底からゆるがすものであり、その導入はあまりに性急であったと断じている。

その後には丸山 [2010] が、開発政策のもとでさらに拡大しつつあったニューカデでフィールド調査をおこなって、ブッシュマンの生計戦略や居住パターンの変化、それに伴う人間関係の再編に関する多面的な議論を展開している。このうちとくに注目されるのは、再定住地からやや離れた位置に居を構え、家畜飼養や農耕を営むブッシュマンの姿である。丸山はこうしたキャンプを、ブッシュマンが用いていたツワナ語の名称を用いて「マイパー」と称している。

ニューカデ付近のマイパーの利用者の中には、車やロバ車などの移動手段をもつ世帯が全体の半数近く含まれていた。これらの世帯は、親族関係をはじめとする再定住以前の人間関係を維持しながら、再定住地とマイパーの間を頻繁かつ容易に往還していた。そして、再定住地内で商店を営む傍らで、マイパーにおいては家畜をふやすなどの方法で財を蓄えていた。さらに、このようにして生まれた富裕世帯の周りには、家畜の世話や家の補修などの賃労働の機会を得ようとする者たちが集まっていた。そして、財をもちながらも他者に労働の機会を与えないことは、住民の明らかな非難の対象となっていた [丸山 2010: 221]。これらの知見に基づいて丸山 [2010] は、マイパーは、再定住地で受けられる年金受給や食料配給などの行政的なサービスと、再定住地付近ではアクセスしづらい自然資源の両方を活用できる生活様式を可能にしていると特徴づけた。

3. ボツワナ政府の環境保護政策と定住地カガエ

3.1 定住地と環境保護政策

上記の研究がおこなわれてきたニューカデや本論文のフィールド調査が実施されたカガエをそのうちに含むハンシィ地区にはツワナ、カラハリ、ブッシュマン、ヘレロ、ポーア（オランダをはじめとするヨーロッパからの入植者に起源をもつ人々）などが古くから居住してきた。ハンシィ地区における土地および自然資源の利用の変遷には、第2章でみたようなさまざまな民族間の関係や国家政策に加えて、環境保護をめぐる国際的な潮流も絡み合った複雑な歴史が反映されている [Twyman 2001: 51]。南部アフリカでは1980年代半ば頃から、遠隔地 (Remote Area) における持続的な経済の確立と野生動物保護の両方を達成するために、コミュニティ開発と野生動物管理を結びつける考え方が推し進められるようになった。その結果、ボツワナだけでなく、ジンバブウェ、ナミビア、南アフリカなどでも同様のコミュニティ開発計画が進められている。このうちボツワナ政府は、国土の20パーセントをコミュニティ開発と野生動物保護の両目的を達するための地域とすることを提示し、1986年に Wildlife Management Areas (以下 WMA) を設立した。このためボツワナでは現在、国立公園、動物保護区、森林保護区、そして近年できた WMA という自然資源の保護制度が並存している [Twyman 2001: 49]。

ハンシィ地区を中心とする地域では、1992年に Okwa WMA が設定された。これは、1991年にこの地域のマネジメントプランが作成されたことに付随する。さらに1995年には、ハンシィ地方政府およびボツワナ政府の承認を受けて、ハンシィ地区における Community Based Natural Resource Management (以下 CBNRM) プロジェクトがはじめられた。この地域には Okwa 川をはじめとする古河川があり、その周辺にパン（窪地）が散在するなどの地理的特徴から、野生動物が多く生息している。そのため、観光資源としての野生動物保護を重視するボ

ツワナ政府の CBNRM プロジェクトはハンシィ地区を優先的に取り扱い、ここでプロジェクトを成功させ、国内のモデルケースとすることを目指した。政府が示したこの政策の主要な目標は、「野生動物やその他の自然資源について、継続可能な使用と管理の体制を作り上げること」であった。計画の当初から、観光会社と地域のコミュニティがパートナーシップを形成して自然資源の観光利用をおこないながらこの目標を達成することが見込まれていた。双方が利益を得るため、観光会社はマネジメントおよびマーケティングのスキル、地域のコミュニティは土地の権利と野生動物資源を提供した [Twyman 1998]。その後、事業から収益をあげた観光会社はより長期にわたる借地権と野生動物へのより大きなアクセス権を獲得し、この地域の住民はサファリ関連での就業の機会を得ることとなる。

1996 年になると、野生生物・国立公園局 (Department of Wildlife and National Parks) が、ハンシィ地区にある定住地の住民に対して、はじめての CBNRM プロジェクトの説明会を開催した。地区内にあるすべての定住地を担当者が訪問し、新たに設定された狩猟地域の詳細を含む政策と、新たに提案されるプロジェクトについての説明をおこなった [Twyman 1998: 750]。こうした環境保護政策との関連でとくに注目されるのが、本研究で主要な調査地とした定住地カガエである。以下にみるように、カガエは歴史的にブッシュマンと近隣に住む諸民族、さらにはボツワナと近隣の諸国家の間の交流の要所となってきた。その点で、比較的最近まで狩猟採集に基づく遊動生活をおこなってきた人々の生活拠点となってきたカデヤニューカデとは対照的である。

3.2 カガエの成立史

カガエはハンシィ地区の南部にある。1973 年、政府はカガエにグイおよびコーンの定住地を設立した。聞き取りによれば、カガエができる以前、グイ、コーンは、現在のカガエから 5 km ほど離れた場所にあった政府の井戸、ローントゥリー (Lonetree) に水を求めてしばしば集まっていた。この場所は、ハンシィ大農場地域で飼育されていたウシを売るために、ボツワナ南部の都市ロバツェまで運ぶ際の中継点としての役割を果たしていた。当時、イギリス人やボーアが経営する牧場からロバツェに至るまで、各地でブッシュマンやカラハリの男たちが牧童 (英語通訳によると head boy) として雇われ、徒歩でウシの輸送をおこなっていたようである。また、この地域は付近に野生動物が集まる広大なパンがあるため、よい狩猟場を形成していた。

加えてこの地域には、カガエ成立以前から 2 つのキャトルポスト⁵⁾があった [Twyman 2000]。カガエに公共の井戸が作られる前、付近を遊動域として狩猟採集を中心とした生活をしてきたブッシュマンは、これらのキャトルポストを頻繁に訪れていたようである。そこで

5) 南部アフリカで広くみられる私設の放牧地。キャトルポストの周囲には柵が設けられ、その中に牧夫の小屋や家畜囲いが設置されていることが多い。

表1 カガエ住民の民族出自

民族名	人数（人）	割合（％）
グイ（G!ui）	100	44.4
コーン（!Xoo）	57	25.3
カラハリ（Kgalagadi）	36	16.0
ナロ（Naro）	10	4.4
カマ（Qama）	6	2.7
コト（Mokoto）	5	2.2
ンゴロハ（Mongoroha）	2	0.9
ングァケツィ（Mongwaketsi）	2	0.9
ガナ（G!ana）	2	0.9
イエイ（Moyey）	1	0.4
ロロン（Mororong）	1	0.4
タマ（!hama）	1	0.4
ツワナ（Tswana）	1	0.4
トア（!toa）	1	0.4
計	225	100 %

出所：著者作成。

ブッシュマンは、農場経営者とやりとりして水を得るだけでなく、短期契約で牧童などの労働を手伝ったり、遊動生活の中で得られる動物の毛皮や、ダチョウの卵の殻、薬用植物といった野生動植物資源を提供し、その見返りとして鉄やたばこなどを手に入れる交易をおこなったりしており、この地域で幅広い交流がおこなわれていたことが推察される。現在カガエに居住している住民の多くは、これらのキャトルポストをしばしば訪れていた人々やその親族だと考えられる。このようにカガエ周辺のブッシュマンは、近隣の農場経営者や諸民族と関わる中で多様な生計戦略を使い分け、それに応じた移動や居住のパターンを形成していたようである。

その後、この地域ではハンシィ農場バサルワ土地・水道開発計画（Land and Water Development Scheme for the Ghanzi Farm Basarwa）のもとで開発計画が実施されるようになった。カガエがRADPの定住地として設置されて以降は、学校、水道、医療施設などのインフラが整備されるとともに、政府のサービス（食料配給、年金支給）も提供されるようになった。また、パンからはグラベル（カルクリート）が採集できるので、この付近にすることで道路整備の賃労働に雇われる機会も増えた。これらによってこの地域にはさらに多くの人々が集まり、定住的な生活をするようになったという。

現在のカガエでは、ブッシュマン系のグイとコーン、そしてパンツ系のカラハリが住民の多数派を占め、人口比はその順に3:2:1ほどである（表1）。その他にも政府関係の仕事に就くツワナ、ブッシュマン系のナロ、ガナなどが暮らしている。世帯調査をおこなって住民の出身地（表2）および聞き取りに基づく数十年にわたる移住歴（図2～4）を調べた。以下では

表 2 カガエ住民の出身地

出身地	人数 (人)	割合 (%)
Kaglae	86	38.2
Kang	16	7.1
Xade	15	6.7
Ghanzi	13	5.8
!O!om	12	5.3
Lonetree	11	4.9
CKGR 内その他	10	4.4
Tsetseng	9	4.0
Lehututu	8	3.6
Lokalane	8	3.6
Morgan (キャトルポスト)	4	1.8
Honhukwe	4	1.8
D'kar	3	1.3
Kokong	2	0.9
Kanagas	2	0.9
Takeya	2	0.9
Takatwane	2	0.9
Tsotsa	2	0.9
Oase (ローントゥリー付近のバン)	2	0.9
Kaocue	1	0.4
Chobokwane	1	0.4
Bokonong	1	0.4
Bere	1	0.4
Samesiti (キャトルポスト)	1	0.4
Qangwa	1	0.4
Patric Farm (デカール付近のキャトルポスト)	1	0.4
Nojaane	1	0.4
Motokwe	1	0.4
Mikel Adams (ハンシィ付近のキャトルポスト)	1	0.4
Mogwase Farm (キャトルポスト)	1	0.4
Lolake	1	0.4
Lokwabe	1	0.4
Pitsane (南アフリカ)	1	0.4
計	225	100 %

出所：著者作成。

その結果を民族ごとにみていく。グイは、北はハンシィから南はカン、西はハンシィ農場地帯から東は CKGR 西部までを主たる移動域として遊動生活をしてきた。カガエのグイはとくにニューカデおよび近隣の町であるカン、またそれに続いてカデ、ツェツェン、キャトルポストとの間の移動が多い (図 2)。コーンはナミビア国境に近いボツワナ西部を中心に生活してき

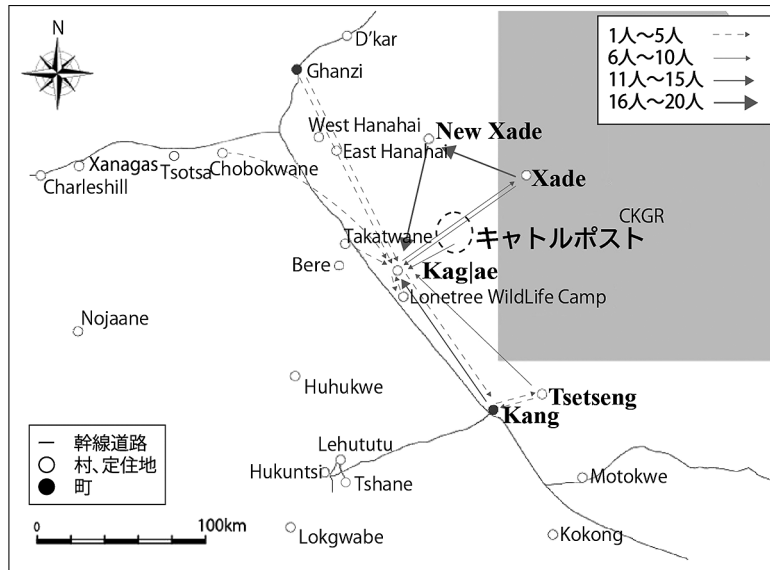


図2 民族別の移住歴（ゲイ）

出所：著者作成.

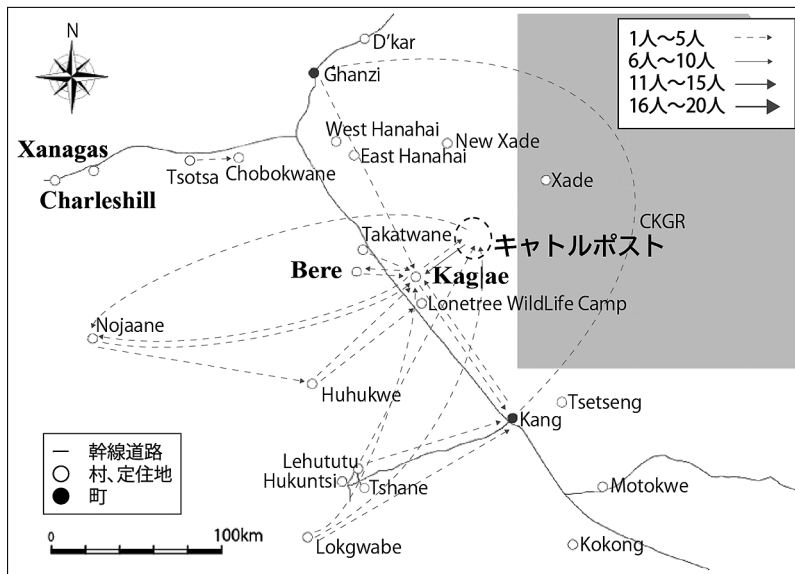


図3 民族別の移住歴（コーン）

出所：著者作成.

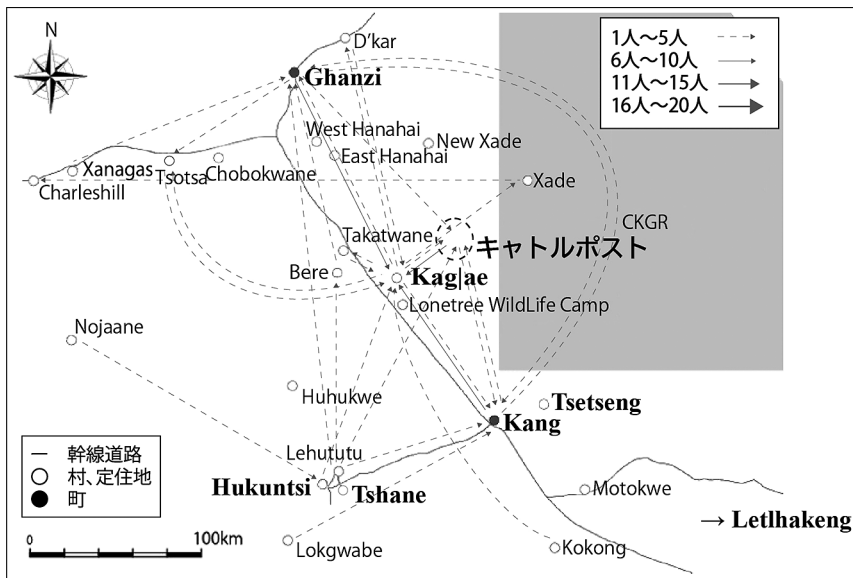


図 4 民族別の移住歴（カラハリ）

出所：著者作成。

ており、チャールズヒル、ハナハス、ベレ、などが彼らの中心的な居住地である。カガエのコーンはこれらのうちのベレ、さらにキャトルポストや近隣のさまざまな町や村との間で移動を繰り返している（図 3）。カラハリの生活域はボツワナ南部に広がっており、ツァーネ、フクンツィ、ツェツェン、カン、レタケンなどが中心的な町である。カガエのカラハリはこれらのうちのカン、それに続いてハンシィやキャトルポストとの間の移動が多い（図 4）。また、カラハリは干ばつの年にはブッシュマンのキャンプに混じり、野生動植物を利用して飢えをしのいでいたという記録があり [大崎 2001]、ブッシュマンとの通婚も多くみられる。これらを通じて、カラハリはこの地域に暮らすブッシュマンとともに広範囲にわたり移動を繰り返してきたようである。またハンシィやデカル、カンといった町には昔から白人やツワナが多く住んでおり、グイ、コーン、カラハリが移動の過程でこれらの人々と接触していたことも推察される。

これらから、現在カガエがある位置は、定住地として整備される以前から多くの民族のコンタクトゾーン [Pratt 1992] であったと特徴づけられる。この地域に暮らしている諸民族間に交流があったことは広く知られてきた。この地域においては、地域を争乱に巻き込むような決定的なコンフリクトは生じていない。本研究では、具体的な聞き取りを通じてこれを裏づけ、さらに上記のようなさまざまな誘因があったことによってこの地域に多様な人々が集まって、かなり友好的な関係が築かれていたことが明らかになった。

もっとも、この地域にもコンフリクトの芽がなかったわけではないこともわかってきた。と

くに住民と政府の間には、地域の自然資源をめぐるしばしばトラブルが生じてきた。こうしたトラブルは、CBNRM プロジェクトがはじまった 1990 年代半ば以降もみられる。ブッシュマンはボツワナ政府の成立以前からこの地域で野生動物の狩猟をおこなってきたが、現在では住民の狩猟は基本的に禁じられている。カガエの付近にはローントゥリー野生生物局ベースキャンプがあり、武装した野生生物局の職員が四輪駆動の自動車で頻繁に見回りに来る。野生生物局の職員は定住地カガエでも狩猟がおこなわれていないか、そして狩猟で得られた肉が消費されていないか、確認している。だが、住民の中には自給用の肉として罫猟をおこなっている人々があり、そうした人々は野生生物局のキャンプに連行されて嚴重注意を受けたり、罰金や禁固の刑罰が課されたりすることもあるという。長年生活の糧を得てきた活動が一方的な政府からの通達で違法行為とされてしまったことに対する住民の不満は理解できる。

また、定住地付近でおこなわれる狩猟が激減したことによって肉食獣の数が増えたため、定住地から少し離れた場所にある家畜囲いで飼われているウシやヤギが、ヒョウやライオンに襲われる事例が頻発している。第一著者（関口）は、カガエに滞在していた 3 ヶ月半の間だけで牛がヒョウに襲われる事件を 3 度確認した。このような場合、牛の飼い主はすぐに野生生物局に連絡を取り、被害状況を報告する。その報告を受けて職員が定住地を訪れ、被害に応じて家畜の治療薬や、保証金が支給されることになっている。しかし、関係者にとって満足のいく対応がなされるとは限らない。筆者が確認した 3 件のうちの 1 件では、カラハリの男性が野生生物局から補償を受けたものの、家畜の被害に見合った金額は得られず、野生の肉食獣を殺すこともできないという不満をこぼしていた。このように政府の意図、すなわち CBNRM プロジェクトなどを通じて住民主導の野生生物の持続的利用を目指すという意図とは裏腹に、カガエ付近の住民にとっては遊動生活を営んでいた頃よりも、人と自然のバランスを保つことが難しくなってきたように見受けられる。

3.3 現在のカガエの概容

調査期間中に確認できたカガエの総人口は 230 人で、その年齢構成は表 3 のとおりである。定住化政策の実施時に政府の役人が主導して居住プロットを割り振ったニューカデ〔高田 2002〕とは異なり、カガエではまず住民が自発的に住居を構える場所を決めて、現在の居住パターンを形成するに至っているようである。民族別にみると、大まかにはグイが定住地の東側、カラハリを間に挟んでコーンが西側に暮らしている（図 5）。またトウィマンは、グイとコーンの間で、採集や狩猟をおこなうためのテリトリーも東西に分かれて広がっていたことを報告している〔Twyman 2000: 794–795〕。これらを考慮すると、自然資源をより多く利用する生計戦略をとってきたブッシュマンの 2 集団の間で、起こりうる競合やコンフリクトを事前に避けるためにすみ分けがおこなわれてきたと考えられる。

現在のカガエは、きれいに舗装された幹線道路から東へ 10 キロメートルほど行ったところ

表 3 カガエ住民の年齢構成

年齢	人数（人）	割合（％）
70-80 歳	22	9.8
60-69 歳	25	11.1
50-59 歳	18	8.0
40-49 歳	43	19.1
30-39 歳	46	20.4
20-29 歳	56	24.9
15-19 歳	15	6.7
計	225	100 %

出所：著者作成.

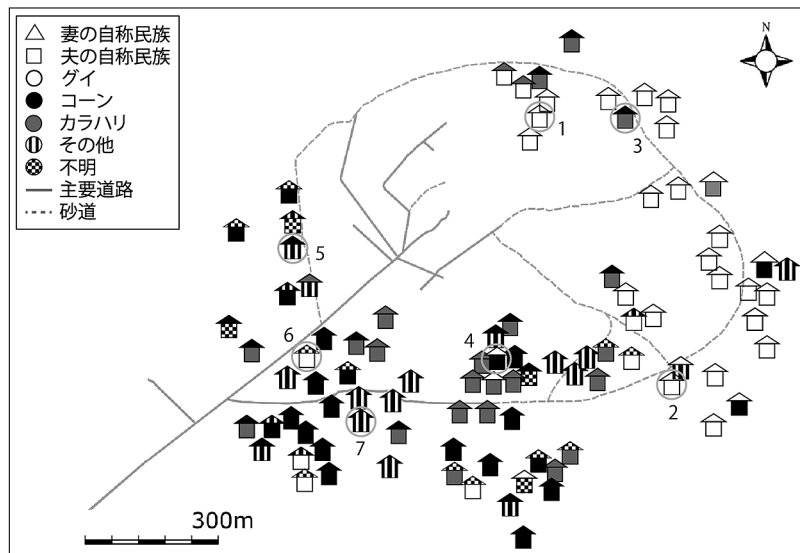


図 5 カガエにおける家の配置：民族別

* 屋根の部分に妻の自称民族名、下の部分が夫の自称民族。寡婦ないしは寡夫の世帯は上下ともに本人の自称民族で統一した。不明は、調査期間中に会えることができなかったが、配偶者の証言により存在が確認されている者。1,000 プラを超える所得をもつ者が含まれる世帯は、住居を丸で囲って番号（1～7）をつけた。

出所：GPS データをもとに著者作成。

にある。この幹線道路は、南アフリカからボツワナの首都ハボローネを通してナミビアの首都ウィントフックへと通じている。内陸国のボツワナにおいては陸上輸送が生命線となるが、この幹線道路はその根幹をなす。幹線道路ではウシなどの家畜、石油、建築材、食料、家具といった、さまざまな荷物を積んだ大型のトレーラーが頻繁に行き来している。カガエの住民に



写真1 乳幼児向け食料配給

出所：2013年，カガエ，第一著者（関口）撮影。

は、伝統医（traditional doctor）として政府の認可を受け、このトレーラーの運転手をおもな顧客として、野生植物から作った薬を販売している人々がいる。こうして伝統医たちが得た現金は、おもにカガエに戻った際に酒場や小売店での直接的な消費に使われる（4.3節で詳しく論じる）。このように現在のカガエは、幹線道路に近いという立地を活かして、南アフリカ、ボツワナ、ナミビアという国家を跨いだ交易に従事する人々とブッシュマンとのコンタクトゾーン、すなわち異なる文化が出会うことで新たな意味が創造される場所としての機能も果たしており、これを反映した多様な生計戦略や幅広い人間関係が認められる。

4. カガエにおける社会変容

こうした状況で、カガエでは現在もさまざまな面でブッシュマンの社会変容が進行している。中でも生計戦略や人間関係の変化をよく示すものとして、以下では、政府の活動と住民の生計活動（第4.1節）、年金の支給とツケ買い（第4.2節）、コンフリクトの事例（第4.3節）、コンフリクト回避の取り組み（第4.4節）を取りあげる。

4.1 政府の活動と住民の生計活動

政府は積極的に定住地のインフラの整備や開発に関わる活動を進めてきた。村にはそうした政府の活動に関わるものとして、幼稚園、小学校、ソーシャルワーカーのオフィス、村落開発委員会（Village Development Committee, VDC）のオフィス、政府が主導して設立した通信サービス会社で携帯電話を扱っている Be-mobile のオフィス、コープ（生活協同組合）、診療所などがあり、それらを中心に教育や行政のサービスがおこなわれている。たとえば診療所では、毎月の乳幼児健診と合わせて乳幼児向けの食料配給がおこなわれている（写真1）。また、



写真 2 住民のおこなう賃労働

* 定住地内部および付近の灌木を切り開き、道や広場を作る。
出所：2013 年，カガエ，第一著者（関口）撮影。

表 4 カガエ住民の教育歴

教育歴	人数（人）	割合（％）
スタンダード 1	4	1.8
スタンダード 2	2	0.9
スタンダード 3	12	5.3
スタンダード 4	11	4.9
スタンダード 5	10	4.4
スタンダード 6	2	0.9
スタンダード 7	19	8.4
フォーム 1	12	5.3
フォーム 2	19	8.4
フォーム 3	30	13.3
フォーム 4	4	1.8
フォーム 5	7	3.1
なし	93	41.3
計	225	100 %

出所：著者作成。

政府は定住地の住民を対象とする各種の賃労働を提供している（写真 2）。

表 4 に住民の教育歴を示した。調査対象者の 6 割近くが学校教育を受けた経験があった。3 割強は就学 8 年目にあたるフォーム 1 以上に通った経験があった。全般的には若い世代の方が高学歴の者が多い傾向が認められた。ただし、教育歴については個人や家族による状況の違

いが大きく、今後さらなる調査が必要である。

第一著者（関口）の調査期間中、カガエにおいて、政府の芸術・文化部局が主催する音楽コンテストがおこなわれた。親指ピアノ、ギター、ハンクレと呼ばれる弦が1本の弦楽器などの演奏、詩の朗読などさまざまな表現活動がおこなわれ、各部門の順位がつけられた。上位の入賞者には賞金も支払われていた。政府の芸術・文化部局はこのように、伝統文化、伝統芸能の活動を村の住民がおこなうことを全国的に振興している。

また村にはサッカーチームがあり、近くにある定住地ベレのチームとしばしば対抗戦がおこなわれていた。ダンスチームもあって、カンで定期的に行われるトラディショナル・ダンス・フェスティバルに向けた練習がおこなわれていた。このフェスティバルの会場では、ブッシュマンが作った装飾品などが販売され、住民の現金収入源となっている。ただし、フェスティバルの参加者は多いとはいえなかった。

狩猟が禁止されていることや周囲の野生生物資源の減退から、現在のカガエでは、表だった狩猟採集活動はあまりおこなわれていなかった。住民はおもに、現地でドラウトと呼ばれる旱魃救済対策事業の賃労働によって得られる現金収入、老人を対象とした年金および食料配給、孤児や乳幼児に対する食糧配給によって家族の食事をまかなっていた（表5）（写真3）。一部には家畜を飼育するもの、畑を耕作する人々もみられた。これらの人々は、そうした活動のために他の住民を一時的に雇うこともあった。

自動車を所有する住民の中には小売業に従事する人々もいた。そうした人々は、距離的には最寄りの街であり、ボツワナのカラハリ地区北東部の中心都市であるカンにある店から仕入れをおこない、村の住民に日用品や食料などの商品を販売していた。村には家畜や野生動物の肉を売るための場所も設けられていた（写真4）。

また、村には手作りの酒を売る家庭がいくつかあり（写真5）、それらのプロットに集まって酒やたばこを楽しみながら雑談をすることが住民の大きな娯楽のひとつとなっていた（写真6）。さらに、村のはずれにはブロック作りの建物、発電機、冷蔵庫、音響機器を備えたバーが1軒あり、毎晩大音量でハウス系⁶⁾の近代音楽が流され、住民は酒を飲みながらダンスに興じていた。ドラウトの給料日や、年金の支給日にはここに多数の住民が集まっていた。

これに対抗するように、自分のプロット内で冷蔵庫を使用して、冷やした酒を売る者もいた。たとえばカラハリの男性Sは、政府の許可なしで個人的に酒類を販売していた。政府の許可を得て上述のバーを運営していたオーナーはこれをよく思わず、直接Sを訪れて抗議した。この抗議を受けてSは、ドラウトの給料日に合わせて政府から一時的な許可を得た。そして、コミュニティホールを借りて、そこでパーティーを開いた。このパーティーには多くの住民

6) 米国で誕生した音楽ジャンルのひとつ。1970年代のディスコやフィリー・ソウル、サルソウル・サウンドなどを起源としている。

表 5 老人、孤児および乳幼児に配給される食物（1 人・1 ヶ月あたり）

対象	分類	品名	量
老人	主菜	SAMP（モロコシの粒）	5 kg
		ベレ（モロコシの粉）	10 kg
		メイズミール（トウモロコシの粉）	12.5 kg
		小麦粉	5 kg
	副菜	豆	1 kg
		コンビーフ缶詰	300 g × 7 缶
		キャベツ	1 つ
	調味料等	砂糖	2.5 kg
		食用油	750 ml
		塩	500 g
		ベーキングパウダー	50 g
孤児	嗜好品	ロングライフミルク	500 ml × 8 パック
		紅茶	250 g
	主菜	ベレ（モロコシの粉）	5 kg
		メイズミール	5 kg
		小麦粉	5 kg
		米	5 kg
		豆	2 kg
	副菜	コンビーフ	300 g × 8 缶
		クノールスープ	2 袋
	調味料等	ケチャップ	700 g
		ピーナッツバター	800 g
		ベーキングパウダー	50 g
		マヨネーズ	750 g
		塩	500 g
		食用油	750 ml
	嗜好品	ロングライフミルク	500 ml × 8 パック
		砂糖	2.5 kg
		リング	3 kg
	日用品	マッチ	2 箱
乳児（4 ヶ月～ 2 歳 11 ヶ月）	主菜	Tsabana（ソルガムと大豆を粉末状にした離乳食）	2.5 kg
	調味料等	食用油	750 ml
幼児（3 歳～ 5 歳 11 ヶ月）	主菜	Malutu（ソルガムと大豆を濃縮した粉末状の栄養食）	5.5 kg
	調味料等	食用油	750 ml

出所：著者作成.



写真3 老人向け食糧配給の日のコープ

出所：2013年，カガエ，第一著者（関口）撮影。

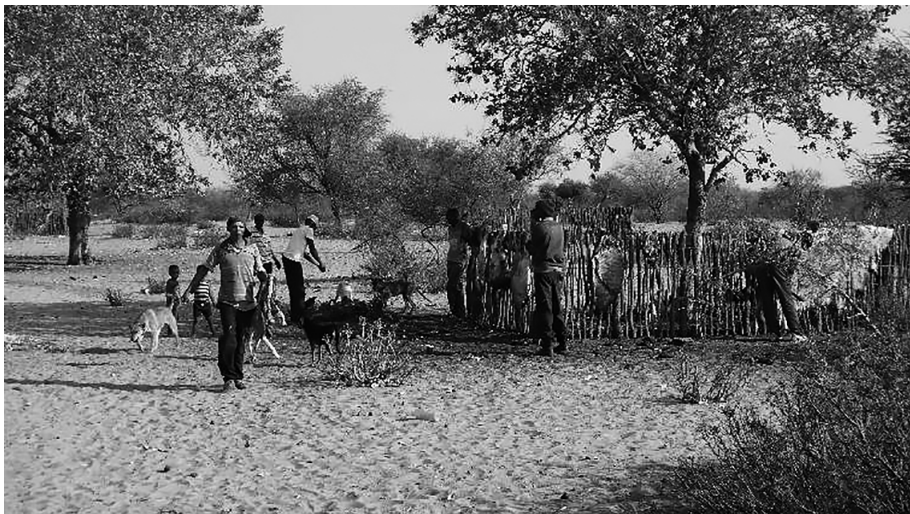


写真4 住民の間で売り買いされる家畜の肉

* 野生肉食獣に家畜が殺されたときなどは，すぐにその家畜を解体し，住民の間で肉の売買がはじまる．肉は吊されているところから好きな部位を選び，ばねばかりを用いて量り売りされる（1 kg あたり 20 ブラ）．定住地から少し離れたところにある家畜囲いでは，野生動物保護政策により頭数の増えたヒョウなどの肉食獣による家畜の食害がしばしば起こる．

出所：2014年，カガエ，第一著者（関口）撮影。

が集まり，Sは多額の収入を得たという。

上記のような日常活動において，住民は政府が提供する食糧配給や賃労働，音楽コンテストなどに積極的に関わっていた．家畜飼育や畑耕作，小売業に取り組む者もあった．したがっ



写真5 カラハリの女性の居住プロットに設けられた酒場での地酒の回し飲み
出所：2013 年，カガエ，第一著者（関口）撮影。



写真6 酒場にて，タバコの回しのみ

* 木の枝をくりぬいたお手製のパイプにフィルター代わりの草とタバコの葉を詰めてうまそうに吸う。頃合いを見て次の人に回されるが，なかなか回してもらえないときには身振りで促したり，吸っている人の袖を引っ張ったりすることもある。

出所：2014 年，カガエ，第一著者（関口）撮影。

て，かなり柔軟に生計手段を選択しているといえよう。遊動時代のサンは，資源の利用可能性に応じて柔軟に狩猟や採集のやり方を変化させていた [田中 1978: 70]。カガエの定住地においては狩猟や採集は減退しているものの，資源の利用可能性に応じた生計戦略の柔軟性という点において，遊動時代のそれと共通点をもっているように思われる。

4.2 年金の支給とツケ買い

カガエを含む、RADPの開発拠点となっている定住地では、老人、困窮者を対象とした年金が毎月支給される。これは住民の生計維持に大きく貢献している。年金は定住地全体の経済活動においても重要な働きを担っており、ブッシュマンの社会変容について考えるうえでとくに興味深い。2015年の調査時には、老人を対象として300ブラ⁷⁾、困窮者を対象として120ブラが支給されていた。受け渡しは郵便局のオフィスにておこなわれる。IDカードもしくは2014年6月から導入されたという年金受給者のICカードを用いた本人確認がおこなわれたのち、現金でその月分の年金が支給される。第一著者（関口）が参与観察をおこなった2014年の11月、12月には、全戸調査の対象者総数の3割近くに当たる61人が年金を受給した。年金の配給の日には政府の自動車がハンシィを出発し、各定住地を回って年金を支給する。車が到着する時間は月によってしばしば異なる。受給を心待ちにする人々は朝早くから晴れ着で郵便局のオフィスに集まり、おしゃべりをしながら車の到着を待つ。

年金の支給に合わせて、定住地外部から行商に訪れる人々もいる。たとえば11月の年金支給日には、ツォツァ（Tsotsa）という町から来たというジンバブウェ人の男性2人が大きなカバンを担いで洋服を売りに来ていた。第一著者の調査助手をしていた男性の妻の母親が、その日に受給した年金から、自身と娘のために一着ずつ晴れ着となるワンピースを購入した。彼女はその後、受給した年金の中からツケ買いの清算をおこなうためにコープへ向かった。コープでは彼女が11月3日に購入したアルミの皿（38.4ブラ）、紙パックの500ml入りの牛乳（7.7ブラ）、酒造りなどに用いられる2.5kgのブラウンシュガー（25.7ブラ）、11月17日に購入した1kgのブラウンシュガー（10.3ブラ）の清算がおこなわれた。このように、老人たちは定期的に決まった額の現金を手にすることがわかっているため、個人商店やコープでツケによる支払いが認められやすい。

4.3 コンフリクトの事例

日常的なトラブルやコンフリクトを丁寧に分析することは、その社会の人間関係においてどのような規範が共有されているのかを知る貴重な機会となる。第一著者（関口）がおこなったフィールド調査の期間中にも、興味深いトラブルやコンフリクトが観察された。まず事例1では、カガエ内の酒場で起こった伝統医とカガエ住民の間のトラブルを紹介する。既述のように、カガエ住民の中には、伝統医として政府の認可を受けて薬の販売をおこなう人々がいた。彼らは野生植物を原料とし、痛み止め、胃腸薬、幸運の薬など多岐にわたる効能の薬を作っていた。伝統医たちはカガエから10kmほど離れたところに伸びている幹線道路沿いの藪の中に草で作った昔ながらの小型の小屋を構え、往来する長距離トラックの運転手をおもな買い手

7) 1ブラ＝約13円（2014年10月時点）。

として薬を売っていた。薬の多くは 100 ～ 300 プラで売られていた。政府の賃労働であるドラウトの 1 ヶ月分の給料が 530 プラなので、この薬の価格はかなりの高額だといえよう。実際、伝統医たちは他のカガエ住民ではありえないほどの額の現金を手に入れていた。顧客の多くはリピーターとなっている固定客だった。彼らはそれぞれ個別の伝統医と携帯電話の番号を交換しあい、ほしい薬の種類を指定して仕事でカガエの前を通りかかる日時までに用意するよう依頼していた。これらの固定客は、しばしば伝統医たちに小麦粉やメイズミール、コンビーフ、食パンなどの食料、缶ビールやチュブクというパック詰めにしたソルガムの醸造酒などの酒類、衣料品などを供与していた。

顧客がいつカガエ付近に来るかは電話でほぼわかる。したがって、伝統医たちはそのときだけ幹線道路沿いに赴き、普段はよりインフラが整っているカガエ居住地内に住居を構えて暮らすことも可能だろう。しかし実際は、伝統医たちは常日頃から藪の中に設けた小屋で暮らしており、定住地に近づくことはあまりなかった。伝統医たちがカガエを訪れるのは、老人年金の支給日、食料配給のおこなわれる日、抗 HIV 薬の配付日、そして酒がなくなって定住地の酒場に行くときなど、必要に迫られた限られた機会のみであった。【事例 1】はそうした機会のひとつ、伝統医が村の外れにあるバーを訪れたときに起こった。

【事例 1】酒場における伝統医とカガエ住民のトラブル

ある日、第一著者（関口）が調査を終え、カガエのバーを助手とともに訪れたとき、伝統医であり、第一著者の助手の親戚でもあるグイの男性 J に出会った。バーといっても小さな小屋がひとつあるだけである。客はそこで酒を買うと、めいめいバーの前に広がる敷地の好きなどところに座り込んで酒を飲みながらおしゃべりをはじめた。店にはガソリンを燃料とする発電機があり、冷蔵庫から出てきたばかりの冷えたビールを楽しむことができる。また、バーの中ではノートパソコンをつないだ大きなスピーカーから、大音量でハウス系の音楽が流されている。踊りの好きな人々は思い思いに体を動かしている。

J も酒を買いに店の中に入り、チュブクをひとパックぶら下げてうれしそうな顔で外へ出てきた。彼は顔見知りの男たちの輪に加わり、腰を下ろして酒を飲みはじめた。しばらくの間、チュブクを回し飲みしながら楽しそうに過ごしていた。そんなとき、数人の男たちが J たちの輪に近づいてきた。何かやり取りをし、しばらくすると大声で口論する声が聞こえてきた。助手とともにその輪に近寄ると、早口で数人の男たちが J に詰め寄っていた。何か非難されていることは見て取ることができた。J はしばらく黙って少しうつむき加減に目を伏せ、座ったままじっと動かなかった。しかし、突然立ち上がり、腰につけているナイフを抜くと、それを男の 1 人に向けて突きつけた。J は非難に対して具体的に言い返すことなく、ただ見たこともないような恐ろしい形相でその男に詰め寄った。助手やその場にいた男たち

はJをなだめるのに大層苦勞した。やっと男性たちに抑え込まれ、けんか相手と引き離されたJは、落ち着きを取り戻して再び店に入った。数パックのチュブクを袋に入れて出てくると、そのまま大通り沿いの居宅へと帰っていった。

第一著者（関口）は後日、助手にこのときのことのあらましを尋ねた。助手によると、酒を回し飲みしていたJたちのところへ来た男たちが、自分たちも回し飲みに加えること、酒が足りなければ新たに買い足すことをJに対して迫っていたそうである。そのときJは、日頃から付き合いがあり、比較的仲のよい人々と酒を共有していた。しかし、訪れた男たちとはあまり付き合いがなく、その要求を拒み続けていた。これに対して男たちは怒り、Jが定住地を離れて、藪の中で草葺きの小屋を建てて暮らしていることなどをバカにするような悪口を並べ立てて挑発した。Jはそれに対して逆上したとのことであった。

カガエ住民は、伝統医が顧客から多くの品々を享受したり、多額の現金を入手したりしていることをよく知っており、しばしばその恩恵にあずかろうと伝統医に接触を試みる。上の事例では、人々が伝統医に対して常日頃から抱えている妬みの感情が、酒場の雰囲気や酔った勢いで表面化したようである。このようなトラブルを回避するための方略として、伝統医たちはしばしば酒場でチュブクの回し飲みをしていた。その場で得られた財の一部を周囲の人々と共有するのである。ただし、そうした場でも彼らは決してその人々に現金を手渡すことはなく、酒というモノに変えてから供与をおこなっていた。また、住民からのベグgingはきわめて頻繁であり、伝統医たちも決してそのことをよく思っていない。むしろ、一部の非常に親しい友人以外に対して仕方なく、といった様子でチュブクを分け与えていた。

遊動生活を送っていたブッシュマンの研究においては、物の供与や分配がおこなわれる際にはあくまで分ける側が主体となり、要求のようなものはほとんどおこなわれていなかった〔田中 2001: 47-51〕。これに対して現在のカガエ定住地では、かなり強く、直接的に物の供与や分配の要求がおこなわれていた。たとえば、他の人の会話を遮って直接そうした要求をおこなうことや、そうした要求に腕をつかむなどの身体接触を伴うことがしばしばみられた。

次に、カラハリの女性Gとその畑の隣人との間で生じたコンフリクトの事例を紹介する。Gはカガエにおいて要職（チーフ）についているゲイの男性の妻である。Gの畑は、政府によってカガエの住人用の畑地として定められた区画にまとめて作られていた。カガエの住人が畑地を申請すると、誰でもこの区画の一部にそれが割りあてられる仕組みである。ただし、この区画は定住地からは東に5 kmほど離れており、日常的には他の住人の目に触れることの少ない場所にあった。Gはカガエの住民としては珍しく、かなり早い時期から熱心に畑耕作をおこなっていた。その甲斐があって、畑からの収量は順調に増えていった。しかしながら、成功したGの畑の様子をみた他の住民は、Gに対して妬みの感情を抱くようになったようである。

【事例2】畑の隣人からの妬み

あるとき、ツワナの一分派であるモンゴロハ（Mongoroha）の女性Nが、Gの畑の隣に新しく畑を開墾した。しかし、Gが熱心に働き、収量も多い畑とは対照的に、あまり畑仕事をおこなわない隣のNの畑は目に見えて収量が少なかったという。Nはそれを逆恨みし、Gが畑の近くで飼っていた鶏をNが勝手に殺して食べてしまうなどのトラブルが起こるようになる。

するとGは、この隣人Nからの妬みを恐れ、成功していた畑を放棄し、政府によって定められた畑の区画から離れた藪の中に新たな畑を開墾しはじめた。これは木を伐り払い、ロバで土を耕す大変な労働を必要とするものであった。このときの心情としてGは、「隣人Nからの呪い（英語通訳によると witchcraft）が怖かった、その近くでは耕作したくなかった」と語った。ところが、この新たに拓かれた畑の隣にGを追いかけるようにしてやってきたNが、またしても自身の畑を開墾した。

この頃からGは、左腕の痛み、視力の低下（一時は見えないほどになった）、全身の腫れなど、身体の不調を感じるようになった。これをGは、Nによる呪いととらえた。恐れを抱いたGは畑耕作をやめてしまった。

カラハリやツワナに呪いの習慣があることは古くから知られている [Schapera 1971; Amanze 2002]。ただし、ここでNが実際に呪いを実践したのかどうかは定かではない。いずれにせよ、カガエの住民が隣人からの呪いに対して大きな恐れを抱いていることは確認できる。Nについては、他の住民からも「あそこの家は危険だから、物を出されても食べてはいけない、毒を盛られるぞ」「前にあそこでご飯を食べさせられて、その後すぐに死んだやつもいる」という語りがなされていた。

上の事例から見て取れるように、現在のカガエでは、富裕になった人々が親族らの暮らす居住地と距離をとり、直接的な接触をできるだけ減らそうとしているケースが多かった。遊動生活を送っていた頃のプッシュマンの社会でも、平等な分配は、人々が顔見知りからの妬みを買ひ、仲間はずれにされることへの恐れによって動機づけられていた。ただし、この時代には、居住集団の離合集散が頻繁におこなわれることがコンフリクトを回避する重要な仕組みとして働いていた [田中 2001: 47-51]。この仕組みでは、コンフリクトの当事者のどちらにも移動する可能性がある。また、自然資源の利用可能性に応じて居住集団自体が頻繁に移動するので、そうした資源へのアクセスも個々人の移動によってそれほど影響を受けない。これに対して現在の生活では、定住地から離れることはそこに整備されたインフラ、年金、配給などのサービスへのアクセスから遠ざかることを意味する。そのコストは非常に大きい。それでも、上記のように妬みが生じた場合、それが収まることを願いつつ自発的に定住地から空間的な距

離をとるのは、たいてい妬まれる側、すなわち富裕な人々の方であった。定住地においては少数派である富裕な人々は、隣人からの妬みやそれに伴って生じうる住民たちによる排除を非常に恐れていた。

4.4 コンフリクト回避のための居住地選択

本節では、世帯調査から得られた住民の住居の位置、民族、収入に関する情報に基づいて、社会的なトラブルやコンフリクトを回避するために居住地選択がおこなわれていたことを示す。カガエでは住民の約半数にあたる 111 名が、政府が提供する旱魃救済対策事業の賃労働（ドラウト）についていた。ドラウトでは、ゴミ拾い、灌木の伐採、政府関係の建物の建築作業のいずれかをおこなうことによって、月あたり 530 ブラ（ギニー）の給料が支払われていた。雇用は月ごとの契約となっており、仕事をしたいものは毎月申請をする必要があった。定員は 111 名に限られており、申請の日に先着順で仕事が与えられていた。

その他の住民の中には安定した現金収入のない人々がかなり含まれていた。そうした人々は、親戚や友人に依存した生活を送っていた。居住地全体でみれば、政府が提供するサービス（上記のドラウト、老人を対象とした年金および食料配給、孤児や乳幼児に対する食糧配給など）が非常に充実しているため、そうした親戚や友人に依存した人々も食べていくことに困ることはほとんどなかった。もっとも、多くの住民が好む紅茶、酒、煙草などの嗜好品を得るためにはそれなりの現金が必要である。

安定した現金収入のない人々がかなりいる一方で、数は少ないながら学校や政府の事務所、協同組合の店のガードマンなど、月々 1,000 ブラを超える収入を得ている人々も存在した。図 5 では、そうした人々が暮らす住居に丸印と番号をつけてある。この図では、複数の民族の通婚により生じた世帯は、屋根とそれ以外の部分の色・パターンを変えて示してある（屋根の部分が妻の自称民族名、下の部分が夫の自称民族）。また、そうした世帯を本文で表記する場合は、両者をスラッシュでつなげて記す（たとえばコーンの妻とカラハリの夫からなる世帯は、コーン／カラハリと記す）。図 5 が示すように、1、2 はグイの富裕者の住居で、グイの居住地の周辺部に設けられていた。3 はコーン／カラハリの富裕者の住居で、カラハリの居住地の外部に設けられていた。4 はグイ／コーンの富裕者の住居で、グイ、コーンの居住地の周辺部に設けられていた。5 はコーン／その他の富裕者の住居で、コーン、その他（ヘレロ、ツワナなど）の居住地の周辺部に設けられていた。6 は不明／グイの富裕者の住居で、グイの居住地の外部に設けられていた。7 はナロ／白人（その他に分類される）の富裕者の住居で、その他の諸民族の人々の居住地（ただし、居住地としてのまとまりはあまりない）の中に設けられており、さらに他の住居とはかなり距離が離れていた。

つまり、住民の中で高額な収入がある富裕者では、自分やその配偶者の出身とは異なる民族が多く暮らしているエリア、もしくは自分やその配偶者の出身民族が多く暮らすエリアの周縁

部に住居を構えている世帯が多かった。カガエの定住地は見通しがよく、それぞれの住居の境界は、杭と針金で作られた区切りでしか分けられていなかった。そのため、隣人が食事、飲酒、喫煙などを楽しんでいる姿はたいい周囲からも一目瞭然であった。しかし、高額な収入がある人々は、親族関係をはじめとした従来型の人間関係が優勢となるエリアから相対的に距離をおいた居住地選択をしており、さらに境界の杭や針金が隣人の住居と接していなかったりその間に茂みがあったりしているところが多かった。富裕者たちはこれによって従来型の人間関係に基づいた断りにくいベギングが生じる機会を未然に減らそうとしていた可能性がある。

5. 総合考察

第2節で示したように、初期の研究者は遊動生活を送っていた頃のブッシュマン社会を平等主義の原則に貫かれた自律的な社会として特徴づけた。また、その後の多くのブッシュマン研究は、ブッシュマンの社会に外部から変化がもたらされることによって平等主義の原則がゆらぐが、それに対するブッシュマンたちのゆり戻しによって平等主義社会が再編される過程として、ブッシュマンの社会変容を記述・分析してきた。ブッシュマン研究者以外には意外と知られていないことだが、こうした研究は大半が、近年までカラハリ砂漠の中央部で狩猟採集に基づく遊動生活を維持してきたグイやガナを対象とし、彼らの大半が定住、再定住したカデ、ニューカデでおこなわれたものである。しかし、この地域からそれほど離れていないにもかかわらず、近隣の諸民族や諸組織とより深く関わってきた歴史をもつブッシュマンの居住地は少なくない。カガエもそのひとつであり、ブッシュマン社会の自律性や文化的多様性を論じるうえで重要である。そこで第3節と第4節では、カガエ付近のブッシュマンの社会変容を、おもに著者たちのフィールド調査に基づいて記述・分析した。本論文ではさらに、これに基づいてブッシュマン社会における平等主義の原則とその変容に関する議論を再考したい。そのため、以下ではまず平等主義の原則と関連づけて理解されてきたブッシュマンの居住パターン、人間関係、生計戦略に焦点をあてて、先行研究において厚い記述がなされてきた、カデからニューカデへと居住地を移してきたブッシュマンと現在カガエに住んでいる遠隔地居住者たち（ブッシュマンやカラハリなど）の類似点と相違点を論じる。

5.1 カデ、ニューカデとカガエー類似点と相違点

まず、居住パターンについて、居住地全体を見渡すと、住民の出身地の相対的な位置関係を反映して、定住地内でも民族集団や出身地を同じくする集団ごとに居住区域が分かれていることは、カデ、ニューカデとカガエに共通する。カデとカガエでは、定住化当初からこうしたすみ分けが自発的になされた。これに対してニューカデでは、定住化政策実施当初は政府の役人が主導して居住プロットを割り振ったことに起因する混乱が生じた。しかしその後、再定住地からやや離れたマイパーに住居を構え、家畜飼養や農耕を営みながらも、親族ネットワークな

どを活用して再定住地の中心部と頻繁に行き来するブッシュマンが増えた。こうした居住パターンは、それぞれの集団がまとまって、他の集団の動きに配慮しながらその土地の資源にアクセスしてそれを利用すること、さらには集団間の一定の力の均衡を保つことを可能にする [丸山 2010; 田中 2017]。

ただし、居住パターンに関する個々人の動きに注目すると、それぞれの居住地の間の違いがみえてくる。まずニューカデでは、再定住地内のプロットでは行政的なサービス、マイパーでは自然資源の恩恵を享受しつつ、居住者は親族関係などのネットワークを利用して双方の住居を往還するという機能分化が起こっている。一方、カガエではこうした住居の往還による機能分化は確認されていないが、住民のうち相対的に富裕な人々の多くが、自分の出身民族が多く暮らすエリアから空間的に距離を置いて住居を構えていた。富裕者たちはこれにより、伝統的な人間関係の規範に基づく分配が生じる機会を未然に減らそうとしていたと考えられる。

次に、人間関係について。どの居住地でも親しい親族や友人間での相互扶助が盛んにおこなわれていた。すなわち、カデでは定住地の中に分散し、親しい親族や友人から構成される小規模な居住キャンプの中では、遊動生活をしていた頃とほとんど変わらない人々の間での平等な分配がみられた。騎馬猟の隆盛によってそうした平等な分配が脅かされることが危惧されたが、槍猟、犬猟、毘猟においては、長年ブッシュマンたちが親しんできた平等な分配が維持されていた [池谷 1994, 2007]。ニューカデへの再定住後も、こうした相互扶助は再定住地内のプロットとマイパーを結ぶ人間関係に引き継がれた [丸山 2010]。カガエでも、大半の住人は相互扶助を盛んにおこなっていた。住民には安定した現金収入のない人々がかなり含まれていたが、そうした人々も政府が提供するサービス（ドラウト、老人に対する年金および食料配給、孤児や乳幼児に対する食糧配給など）を受けている親戚や友人を頼って生活しており、食べていくことに困ることはほとんどなかった。

ただし定住地全体を時間的、空間的に俯瞰すると、カガエでは早くから自らやその配偶者の民族集団だけに閉じていない、多層からなる複雑な人間関係が結ばれていたことがわかる。カガエ付近は歴史的に、野生動物のよい狩猟場、ブッシュマンに水や仕事を提供するキャトルボスト、野生動植物資源と鉄やたばこを交換する地域交易の拠点、ハンシイ大農場とボツワナ南部の都市ロバツェを結ぶウシの交易のための重要な中継点、RADP や CBNRM プロジェクトの中心地のひとつといった位置づけにあった。これらが誘因となって、この地には民族、国籍、それ以外の社会的立場を異にする多様な人々が集まり、友好的な関係が築かれてきた。

現在も、親しい親族や友人との関わりだけではなく、民族集団ごとに分かれた居住区域を跨いだ関わり、国際的な物流を担うトレーラーの運転手に対して伝統医が薬を販売することによる関わりなどをおこなっている。ニューカデでは、再定住化政策が事実上、国内の多数派であるツワナの生活様式をブッシュマンに導入することだったことから、再定住ではツワナと非ツ

ワナの差異，グイとガナの差異が際立つこととなった。高田〔2002〕は，これが人々の民族アイデンティティを顕著に意識させる方向に働き，差異のポリティクス〔Young 1990〕が重要になってきていると論じている。カガエ付近では，さまざまな民族間の関係，少数派のブッシュマンをめぐる国家政策，国際的な環境保護政策の潮流が複雑にからみ合って，こうした状況がはるかに早くから形成されてきたと考えられる。

第3に，生計戦略について，自然・社会環境の中の利用できる資源の状況に応じて多様な選択肢を柔軟に使い分けるという特徴は，カデ，ニューカデとカガエに共通してみられる。「カラハリ砂漠のブッシュマン」は，決して石器時代の生活をそのまま伝える生きた化石ではない。カデではさまざまな猟法の使い分けがみられ〔池谷 1994, 2007〕，ニューカデでは再定住化政策の実施後まもなく，馬を使った商業的な狩猟活動，比較的規模の大きい家畜飼養や農業を活発におこなう人々があらわれた〔高田 2002〕。ニューカデではさらに，再定住地において受けることのできる行政的なサービスと，マイパーでアクセスし易い自然資源の両方を活用する生活様式が生み出された〔丸山 2010〕。カガエでは，住民は政府が提供するさまざまな賃労働，日用品や酒を取り扱う小売業，スポーツや伝統文化・芸能を振興する活動など，多様な活動に従事する人々がみられる。これらは昔からブッシュマンが営んできた活動とは大きく形を変えているが，人々が柔軟に生計手段を選択するという点では，ブッシュマンの慣れ親しんできた生計戦略がよく反映されている。

もっともカガエでは，狩猟採集社会の根幹をなす生業活動としてとらえられてきた狩猟採集活動がカデ，ニューカデよりもずっと早くから減退し，その変化は不可逆的なもののように思われる。その一方で，近年カガエのグイやコーンは，観光ロッジや動物保護区内でブッシュマンの伝統的知識を披露する「ブッシュマン・トレイル」や観光ガイドにいち早く参入した。これは彼ら・彼女らの伝統的な生態学的知識を観光資源として商品化する新たな動きとしてとらえられる。この新たな動きは，政府が推進する，自然資源の持続可能な使用と管理の体制を観光ロッジやサファリ会社と協力し作り上げる目的に応じたものだと考えられる。しかし，その成否についてはまだ予断を許さない。こうした動きはニューカデの住民にも波及しつつあり，今後の展開が注目される〔丸山 2017〕。

5.2 オールタナティヴな社会観

上記のようなカデ，ニューカデとカガエにおける社会変容の類似点と相違点について比較考察を進めることは，ブッシュマン研究全体を再考することを促す，オールタナティヴな社会観を導く。既述のように従来の研究は，ブッシュマンの社会に外部から変化がもたらされて平等主義の原則がゆらぐが，それに対してブッシュマンたち自身のやり戻しが起こることで平等主義社会が再編されていく過程としてブッシュマンの社会変容を描いてきた。こうしたパースペクティブからみれば，上記のカガエの特徴，すなわち裕福な人々による親族との関わりを減退

させるような居住地選択、自らの民族集団だけに閉じていない多層からなる複雑な人間関係（e.g. 民族集団の居住区域を跨いだ関わり、トレーラーの運転手との関わり）の形成、狩猟採集活動の不可逆的な減退などは、ブッシュマン社会の根底からの変化、すなわち親族を中心とする親しい者たちの間の共同と分配に基づいた平等主義の原則が崩壊しつつあるようにみえるかもしれない。

しかしながら、ずいぶん早くからこうした根本的に思えるような変化があったにもかかわらず、カガエのブッシュマンを周辺の諸民族や諸組織と区別する文化的な境界、すなわち社会的な存在としてのブッシュマンを特徴づける集合表象は、その表面的な姿を柔軟に変えながらも、歴史を通じて失われずに維持されてきた。いいかえれば、コンタクトゾーンであるカガエのブッシュマンにとって、周辺の諸民族や諸組織との交流は古くから一般的なことであった。それにもかかわらず、カガエでは現在に至るまで基本的にはブッシュマン系のグイとコーン、そしてバンツ系のカラハリがそれぞれの民族ごとにすみ分けをおこなっているし、それぞれの言語もよく維持されている。またグイやコーンの人々は、狩猟採集民としてのブッシュマンの集合的な表象を商業利用する「ブッシュマン・トレイル」や観光ガイドに積極的に参入している。こうした周辺の諸民族や諸組織との深い関わりによって大きな社会変容を経ながらもその文化的な境界を維持している集団の例は、他のブッシュマン、たとえばナミビア北中部のクンでも認められる [Takada 2022]。

こうした事例は、自然・社会環境との不断の相互作用を続ける、ダイナミックで開かれた関係調整システムとしての社会観を示唆する。すなわち、平等主義の原則が他の社会活動に反映・波及して自律的なブッシュマンの社会を形作っていたというよりは、各々のブッシュマンが周囲の自然・社会環境の中にある多様な資源を柔軟かつ創造的に利用しながらその社会的活動のありようをさまざまに変化させ、同時に周辺の諸民族や諸組織とのやりとりを繰り返す中で、集団としての境界やアイデンティティを形成してきたと考えられる。ブッシュマン社会の根幹にある特徴とされてきた平等主義の原則はそのひとつの帰結であって原初形態ではない、と私たちは考えている。

こうした社会観は、リーや田中らの生態人類学的研究を強く批判した見直し派のそれを思い起こさせるかもしれない。1980年代には、エドウィン・ウィルムセン (Edwin Wilmsen) らの見直し派と呼ばれる研究者が、ブッシュマンと呼ばれる人々は近隣諸民族を含めた政治経済的システムの中で下層に追いやられた人々の集合に過ぎないと主張し、リーや田中らの生態人類学的研究（見直し派との対比では、伝統派と呼ばれる）は「孤立した自律的なサンの社会」という幻想を創出してきたという痛烈な批判をおこなった [Wilmsen 1989, 1990; Wilmsen and Denbow 1990]。これに対して伝統派は、ブッシュマンと近隣諸民族との接触があった地域、その程度、さらにはその解釈に関して見直し派に強く反駁した [e.g. Solway and Lee

1990; Lee and Guenther 1993]. こうした応酬は「カラハリ論争」と呼ばれる、狩猟採集社会研究の根幹を問い直す大きな論争へと発展した。

このカラハリ論争を契機として、伝統派と見直し派の枠組みを超えてサン人の歴史を復元する動きが活発になり、現在では近隣の諸民族や諸組織との関係史を見すえたうえでブッシュマン社会について考えていくことが求められている。とりわけブッシュマンの社会変容についての研究では、そうした近隣の諸民族や諸組織との歴史的な関係に光をあてることは不可欠だとさえいえるだろう [Kent 2002; Dieckmann 2007; Takada 2022]。本論文もそうしたトレンドを反映している。ただし、ブッシュマンが周辺の政治経済的システムの中で形成された下層階級の集合体にすぎない、という見直し派によるイメージ [Wilmsen 1989: 32, 270-271, 324-325] は一面的にすぎる [Takada 2022]。著者たちは、ブッシュマンの特徴をその政治経済的な状況に還元しようとした見直し派とは異なり、そのエスニシティの文化的な次元についての分析を展開し、それと政治経済的な状況との多様な関係について論じていこうとしている。カガエ付近の人々が示している生計戦略の幅広さや行動選択の柔軟さ、コンフリクトを避けつつ共同体の維持と平和的共存を希求する姿は、ブッシュマンだけでなくカラハリをも含むこの地域の人々に通底する生活文化であり、時代や社会、自身を取り巻く環境の急激な変化に対応するレジリエンスの高さを示しているのではないだろうか。

さらに、こうした社会観はこれまでのカデやニューカデにおけるブッシュマン研究が提示してきた社会変容についても再解釈を可能にする。たとえば池谷 [2007] が報告した、カデ時代に馬を複数所有する者が親族らにそれを使わせて騎馬猟を組織し、貢献度に応じて肉（現金獲得にも用いられる）を分配するという実践は、裕福になりつつある人々が周囲からの妬みを恐れ、就労機会を提供することでコンフリクトを回避するための取り組みだとも考えられる。これはカガエで家畜を飼育したり、畑を耕作したりするブッシュマンたちがおこなっている、他の住民の一時的な雇用に相通じる生計戦略である。また丸山 [2010] は、ニューカデからかなり離れた位置に他のマイパーよりもきわだって規模の大きいキャトルポストや畑を設ける「富裕マイパー」について報告している。これは、カガエで例外的な場所に居住地を定めることで定住地内における隣人の激烈なベグgingや悪口を避けようとする裕福な人々を思い起こさせる。したがって、カデでの騎馬猟やニューカデでの富裕マイパーの事例は、上述したような、多様な資源を活用した、ダイナミックで「他者」に開かれたコンフリクトの回避・調停の実践あるいはその兆しとして再定式化しうる。

本論文の冒頭で述べたように、ブッシュマンは実際には多様な地域・言語集団から構成されるが、そのうちの多くについては未だに十分な研究がおこなわれていない。これまで光があたっていなかったさまざまな事例についてのフィールド調査をおこなうとともに従来の研究の再解釈を進めることで、上記の方向性の議論はさらに発展させることができる。これはブッ

シュマンと近隣諸民族、国家や国際機関を含むさまざまな組織、さらには大小さまざまな規模の市場との関係やその歴史的な変化をより積極的かつ肯定的に評価することを可能にする、ブッシュマンの地域研究を展開することにつながると考えられる。

引用文献

日本語

- 池谷和信. 1994. 「二世紀の狩猟採集民—ボツワナ, サンの事例から」『季刊民族学』68: 104-114.
- . 2007. 「カラハリ狩猟採集民における生業と分配—危機に対する戦略としてのモラルエコノミー」『アフリカ研究』70: 91-101.
- 大崎雅一. 2001. 「セントラル・カラハリ年代記」田中二郎編著『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』京都大学学術出版会, 71-114.
- 高田 明. 2002. 「セントラル・カラハリ・サンにおける社会変容—人口動態, 生業活動, 乳幼児の体重の分析から」『アフリカ研究』60: 85-103.
- 田中二郎. 1978. 『砂漠の狩人—人類始原の姿を求めて』中央公論社.
- . 1990. 『ブッシュマン—生態人類学的研究 新装版』思索社.
- . 1994. 『最後の狩猟採集民—歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社.
- . 2001. 「ブッシュマンの歴史と現在」田中二郎編著『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』京都大学学術出版会, 15-70.
- . 2004. 「原野の知恵を求めて—ブッシュマンとの三七年」田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至編『遊動民（ノマッド）—アフリカの原野に生きる』昭和堂, 28-47.
- . 2017. 『アフリカ文化探検—半世紀の歴史から未来へ』京都大学学術出版会.
- 寺嶋秀明. 2011. 『平等論—霊長類と人における社会と平等性の進化』ナカニシヤ出版.
- 丸山淳子. 2010. 『変化を生きぬくブッシュマン—開発政策と先住民運動のはざままで』世界思想社.
- . 2017. 「ボツワナ中西部における『ブッシュマン観光』の成立と展開—観光と地域の社会関係のダイナミズム」『アフリカ研究』92: 55-68.

外国語

- Amanze, J. 2002. *African Traditional Religions and Culture in Botswana: A Comprehensive Textbook*. Gaborone: Pula Press.
- Brown, T. 1979. *Setswana-English Dictionary*, 3rd edn, Original published about 1875. Braamfontein, Botswana: Pula Press.
- Dieckmann, U. 2007. *Hai||om in the Etosha Region: A History of Colonial Settlement, Ethnicity, and Nature Conservation*. Basel: Basler Afrika Bibliographien.
- Gordon, R. J. and S. S. Douglas. 2000. *The Bushman Myth: The Making of a Namibian Underclass*, 2nd edn. Boulder, CO: Westview Press.
- Kent, S. ed. 2002. *Ethnicity, Hunter-Gatherers, and the 'Other': Association or Assimilation in Africa*. Washington, DC: Smithsonian Institution Press.
- Kiema, K. 2010. *Tears for My Land: A Social History of the Kua of the Central Kalahari Game Reserve, Tc'amnqoo*. Gaborone: Mmegi Publishing House.
- Lee, R. B. and I. DeVore eds. 1968. *Man the Hunter*. Chicago, IL: Aldine Atherton.
- . 1976. *Kalahari Hunter-Gatherers: Regional Studies of the !Kung San and Their Neighbors*.

- Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Lee, R. B. and M. Guenther. 1993. Problems in Kalahari Historical Ethnography and the Tolerance of Error, *History in Africa* 20: 185–235.
- Okihiro, Y. G. 2000. *A Social History of the Bakwena and Peoples of the Kalahari of Southern Africa, 19th Century*. New York: The Edwin Mellen Press.
- Pratt, M. L. 1992. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
- Schapera, I. 1971. *Married Life in an African Tribe*, the first edition of the original was published in 1940. Harmondsworth: Penguin.
- Solway, J. S. and R. B. Lee. 1990. Foragers, Genuine or Spurious? Situating the Kalahari San in History, *Current Anthropology* 31: 109–146.
- Takada, A. ed. 2016. Natural History of Communication among the Central Kalahari San, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 52: 1–187.
- _____. 2022. *Hunters among Farmers: The !Xun of Ekokwa*. Windhoek: University of Namibia Press.
- Tanaka, J. and K. Sugawara. 1996. Introduction, *African Study Monographs, Supplementary Issue* 22: 3–9.
- _____. eds. 2010. *The Encyclopaedia of the !Gui and !Gana Culture and Society*. Kyoto: Laboratory of Cultural Anthropology, Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University.
- Twyman, C. 1998. Rethinking Community Resource Management: Managing Resource or Managing People in Western Botswana? *Third World Quarterly* 19(4): 745–770.
- _____. 2000. Livelihood Opportunity and Diversity in Kalahari Wildlife Management Areas, Botswana: Rethinking Community Resource Management, *Journal of Southern African Studies* 26(4): 783–806.
- _____. 2001. Natural Resource Use and Livelihoods in Botswana's Wildlife Management Areas, *Applied Geography* 21(1): 45–68.
- Wilmsen, E. N. 1989. *Land Filled with Flies: A Political Economy of the Kalahari*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- _____. 1990. The Real Bushman is the Male One: Labour and Power in the Creation of Basarwa Ethnicity, *Botswana Notes and Records* 22: 21–35.
- Wilmsen, E. N. and J. R. Denbow. 1990. Paradigmatic History of San-speaking Peoples and Current Attempts at Revision, *Current Anthropology* 31: 489–524.
- Young, I. M. 1990. *Justice and the Politics of Difference*. Princeton, NJ: Princeton University Press.